

ICSB2015・ドバイ大会参加記

三井逸友

(JICSB 委員長、嘉悦大学大学院ビジネス創造研究科長)

ドバイ ICSB に行ってきました

2015 年の ICSB 第 60 回大会は、6 月 5 日－9 日の間、UAE のドバイで開催されました。「記念すべき第 60 回大会」ということは繰り返し強調されましたが、既報のように本来は中国青島市での開催が予定されていたもの、これが一年前に急遽ドバイに変更されたという経緯です。もちろん、主催の UAEU アラブ首長国連邦大学はじめとする関係諸方面の尽力で、盛大に盛り上がったことは言うまでもありません。

参加者数、参加国等の詳細はまだ発表されていませんが、開催前の予定で、500 名以上の参加となっていました。中東での開催とあって、世界各地、とりわけアジアやアフリカからの参加も目立っていたものの、あとで触れるように、微妙な国際情勢などもからみ、参加を断念せねばならなくなった人たちもいることは無視できません。

ICSB 自体はますます活発で、2016 年 6 月には米国スティーブンス工科大学(ニュージャージー)での開催が発表され、その後の日程もほぼ決まっています。後述するように、ICSB 理事会の席では、アルゼンチン(アスクア前会長の出身国)、台湾、マレーシアなどの名が言及されていました。欧州のいずれかの国も、予定のうちに入っています。ちなみに第 61 回大会の開かれるスティーブンス工科大は NYC ニューヨーク市の対岸で、そのため NJ/NY と印されています。もちろん、大会最終日には来年度大会のことが盛大に紹介されました。

既定のように今次大会後の ICSB 会長は韓国のキム・キチャン氏ですが、来期の ICSB 会長は、現在 ECSB 会長を務めるイタリアナポリ大学のルカ・イアンドリ氏です。

今次大会にも韓国のプレゼンスは大で、本来 100 人規模を送る予定であった由、MERS 騒ぎで、政府関係者に足止め令が出、半分になってしまったそうです。それでも、今次大会のスポンサーにはヒュンダイも入っていました。

韓国は大会中に「アジアセッション」との題名で、実質韓国セッションも一日開催、その中では韓国語だけのスピーチもあったので、これは ICSB の慣例に反するのではないかとも思いました。しかしながら、大会全体としても ICSB としても、キム会長らが強力にすすめる「中小企業のエコシステム」観点、そしてこれを応用した、HeBEX(エコシステムの健全性指標)研究というのがいっそう前面に出てきている観です。以下でも見るように、みんな勝手に「エコシステム」の言葉を振り回しているような印象も私にはぬぐえきれないのですが(ちなみに、このセッションで私は、HeBEX での「イノベーション」指標に「特許出願件数」が用いられているのは、日本の現実からして制約がかなりあると

申しておきました)。

開会式と全体会

開会式は、6月6日の夜にドバイ世界貿易センター大会議場で始まりました。「週末」の夜にメインの行事があるのは、いかにもアラブの国ならではのでしょう。しかし開会式における、主催国 UAE を代表してのアリ・ラシッド・アルノアイミ氏 (UAEU 副学長)、基調演説を行ったサルタン・ビン・サイード・アルマンソーリ経済調整相らの語られたことには、いずれも顕著な特徴がありました。UAE というと誰もが石油資源による豊かな収入ばかり思い浮かべがちですが、それに依存してはいけな、実際 GDP に対するその比率は 20% 台でしかない、企業家精神を旺盛に発揮し、企業家を育て、イノベーションを積極的にすすめていくことが我々の目標だと。大会全体を通じて、こうした強い意思というものが至る所に感じられました。

実際、ドバイ自体は古い港町で、アラビア半島の玄関口の役割を長年果たしてきているようです。砂漠のなかを切り開き、近代的な超高層ビルや巨大なショッピングセンター、レジャー施設などが建ち並ぶニュードバイとは異なり、オールドドバイを訪れると、賑やかな「あきんどの町」の伝統を彷彿とさせます。企業家精神の伝統は脈々と生きているのです。近代的な建物や巨大なドバイ国際空港も、21 世紀における物流商流のハブたろうとする意欲を顕著に感じさせてくれます。ICSB 会場の世界貿易センターでは、IT 系の大規模な展示会も開かれ、多くの来訪者で賑わっていました。もちろん、そこここを行き交う伝統的な衣装に身を包んだ男女の姿は、不思議な対照をなしているのですが。

今回の大会では、ICSB に長年貢献した、また中小企業と企業家研究に大きな役割を果たした人たちが招かれ、スピーチとともに顕彰の機会を得ていました。そのひとりにはゾルタン・アーチ教授です。現在 LSE 教授を務める同氏は、GEDI グローバル企業家精神と開発研究機構を設立し、「企業家精神エコシステムの各国および地域レベルでの質」に関する GEI 指標を確立・数値比較研究するという、自身の取り組みも紹介していました。GEM の向こうを張り、さらにエコシステムの議論を取り込んでいくという印象もありますが、企業家研究の世界のリーダーを務めてきたアーチ教授らしいチャレンジを示すものであることは間違いありません。ただ、私のように自分はいした研究もしてないのに、ひが目だけは冴えている人間からすると、アーチ教授は 2009 年の ISBE ベルファスト大会の時は、「HIF ハイインパクト企業」などという新概念を唱えてたよね、あっちはどうなっちゃうんだろなどと感じるのですけれど。

ICSB 政策フォーラム

前後しますが、大会前日の恒例「政策フォーラム」は、大会会場と駅を挟んだ向かい側のコンラッドホテル内会議場で開かれ、「適切な規制枠組みを論じる」という主題が掲げられました。要するに、企業家精神にとって望ましい制度的・政策的環境が築かれているかどうかを論じるわけです。アスクア ICSB 会長、ムハンマド・エルバイリ UAEU 学長

の挨拶に続き、シルビア・トレス・カルボネリ教授らが GEM 調査をもとにしながら、ラテンアメリカでの「企業家的エコシステム」の現状を語り、機会の平等と社会的モビリティ、イノベーションと経済発展の原動力としての意義を強調しました。また米国バブソン大学のドナ・ケリー氏からは、「企業家精神エコシステム」のドメイン図も示されました。一方で英国アストン大学のポール・レイノルズ教授は、「なぜ企業家精神を高めるのは容易ではないのか？」として、各国ごとの状況の違いと企業家自身の多様性、萌芽期企業家たちの直面する困難などをあげ、一律の議論への疑問を呈したのは印象的でした。

この辺でだいぶ議論も白熱してきましたが、そのあとには、マレーシア中小企業事業団のダト・ハフサ・ハシム専務理事が立って、マレーシアでの中小企業政策の展開状況に熱弁をふるいました。ハシム氏は今年の ACSB でもスピーチをし、また「アジアの中小企業政策表彰」も受けており、相当の早口で、中小企業の現状およびさまざまな政策展開をこもごも語り、圧倒される思いでしたが、「それでもマレーシア中小企業が GDP 生産などに占める割合はまだ低い」と結ばれたのには、いささかがっかりでもありました。

そのあとは、韓国中小企業公社のリム・チャエウン会長がたち、韓国での中小企業政策の新たな展開を報告しました。韓国中小企業の経営状況が概して停滞し、従来の「格差是正」「大・中小企業同伴」などの政策が期待したほどの効果を上げないなか、政府としては新たな方向として、「国際化推進」に舵を切る、中小企業の国際化対応に強力な支援を行うというのです。これは私としても大いに興味あるところであり、関連して質問をしました。状況は日本に似ているとも思うが、そうなると私が申ししてきたように、すべての中小企業が国際化対応できるのか、特に韓国の政策で近年力を入れてきた対象である、マイクロ企業（小商工人）にそんなことができるのか？という点です。学界出身でもあるリム会長はちょっと戸惑っていましたが、キム・ヨンジン氏が「助け船」を出し、それだから、中小企業の連携が重要なんだ、そちらに注目をして欲しいという話になりました。

最後には、オーストラリアのワレン・マンディ氏が「監督機関と中小企業」という話しをし、諸課題に対する公的規制機関で、中小企業に対する配慮がどれだけ行われているか、これを改善するにどうすべきかといった議論を展開しました。興味あるものではありませんでしたが、オーストラリアの行政や法などに通じていないと、ちょっと細かい、行政のあり方の話題に傾いて、ついていきがたい印象もありました。

いずれにしても毎度のことながら、この「政策フォーラム」は誠に興味深い、情報盛りだくさんのものです。日本のプレゼンスがないのは寂しいことです。

大会各分科会など

今回も各分科会やワークショップなどで、多数の研究発表が行われました。

発表中止になったものもあるので、正確な数はわかりませんが、のべ 300 本はあるものと思われま。アジアアフリカの若手の姿が目立ちました。

日本からは、加藤敦・三宅えり子両氏が「日本の女性企業家と習慣行動」、弘中史子氏が「日本中小企業の海外生産と技術革新の波及効果」、山本聡氏が「中小企業の国際化における企業家的志向性と行動」、久保田典男氏が「国際貿易港による中小企業の海外市場

展開支援」をそれぞれ発表し、またブレーメン大学大学院の播磨重希氏が「途上国での日本からのディアスポラ企業家たちの動機」を発表されました。前年に比べるとちょっと減ってしまった観もありますが、皆さん健闘され、またいろいろ議論を呼んでいました。

分科会での発表などを見ていると、アメリカや欧州の大学にいる、ほかの国々の院生や若手研究者の発表というのがかなり目立ちます。それだけ、中小企業研究が世界に広まっており、さらにまた拡散していることを実感します。「研究の国際化」は目の前の事実です。日本の若手研究者がこうした機会を生かすことがいかに重要になっているか、あらためて感じさせられたところでした。

今次大会では、「ICSB アカデミー」というかたちで、大会前の数日間にわたり、若手を対象とした、系統的な授業やゼミ、企業見学やレポート作成などを組み合わせたプログラムが持たれました。従来の「ドクトラルセッション」に代わる位置づけのようです。参加者も指導担当者も相当数のぼり（参加者は 80 名であったという情報も）、次期 ICSB 会長である、ルカ・イアンドリ教授（現 ECSB 会長）が全面指導に当たるという力の入れようで、今後の ICSB の活動の重要な柱になるという印象でした。

他方で、恒例のガラディナーは 6 月 8 日の夜にコンラッドホテルのボールルームで開催されましたが、なにより「アルコール抜き」であったこと、料理もカフェテリア形式で、昼食時の貿易センター内会場とあまり差がなかったこと（その意味、昼食としては豪華）、アトラクションも男性グループが同じ純白の民族衣装に身を包み、単調な旋律を繰り返しながら、鞭を振るうというもので、申し訳ないけれどあまり魅力的でもなかったことなどで、ちょっとでした。パーティが一段落し、我々ホテル内のワインバーにさっさと入ったら、相次いで欧米系の皆さんも同じところになだれ込み、みんな考えることは同じと実感したものです。

ICSB 理事会と、日本などへの厳しい目

一方で ICSB 理事会では、日本に対するかなり厳しい目が向けられてきました。開催直前にエイマン・タラビシー専務理事から、「日本の現状は問題だ、ICSB で課題を抱える国は、中、印、日だ」というメールが来て、私も焦り、ドバイに着いたその足で、5 日午前開催の理事会に駆けつけました。まあ、そんなに日本が矢面に立たされるほどではなかったのですが、ともかく、タラビシー氏らには、JICSB 設立/認可後 3 年を過ぎ、「日本はたいした貢献をしていない」という不満の思いがたまっているようです。

そこで、私としても「正面突破」に出て、日本の状況と歴史的な経緯を詳しく話す、そして先のタラビシーからのメールに印されていた、「日本での ICSB と ISBC の関係整理、アンブレラボディの構築」というアイディアに賛意を示しながらも、ISBCJ 日本中小企業国際協議会の長い歴史と、実業界行政界との関係の深さ、これに対する JICSB の学界中心の現状等を述べ、さらに ISBC 自体の現状も紹介し、日本での新たな体制づくりには時間がかかると強調しました。

これに対し、タラビシーらからは ISBC への不信感も示され、なんとも悩ましいところでした。ストックホルム大会などでの ISBC との「共同開催」の限界、とりわけ昨年の ICSB ダブリン大会の際にも ISBC 側から働きかけがあったが、ゼニは出さない、自分たちの努力もしない、それでいて会合主宰のみならず ISBC の名前も出させる、何と図々しいと言われました。井出前 ISBC 専務理事の時代については好感を持っていたようですが、いまの ISBC には目もくれないようです。

関係して、私は英国への ISBC 国際事務局移管の話もあるとも言及したのですが、特に反応もありませんでした。なお、こうした情報にも触れうる立場の ECSB 会長のルカ氏は、担当の「ICSB アカデミー」の方に行ってしまったため、5 日理事会の関係では聞く機会がありませんでした。10 日理事会終了後、あらためて同氏に聞いてみたのですが、特段のことは知らない模様でした。ちなみに、次期の ECSB 会長に内定している英国のロバート・ブラックバーン教授は今次 ICSB には来ていませんでしたが、事前のやりとりで、ある程度は ISBC の方の事情も耳に入っている様子ではありました。

ともかく私として「日本問題」の落としどころを示さねばならないと思い、「今後とも会員拡充や活発化、ICSB との関係強化に努めるとともに、ISBC との関係などを含めた発展の努力を、キム新会長と連携して行う」と表明し、理事会としては、これに関する報告を 10 月に求める旨、「決議」になってしまいました。

インド問題では、理事会から私が退席したあとに、メールが舞い込み、インド支部は「脱退する」と表明、理事会はきっと大騒ぎになったことと想像されます。その後のレスを見ると、要するに「脱退とは片腹痛い、インド支部は義務を守らず、自分たちの「発展計画」を実行せず、これはもう支部権限停止だ」としたようです。

中国問題は、最終日 10 日の理事会の議題に載せられました。中国支部の新代表という若い准教授の鄭剛氏(浙江大学)が、釈明とともに、新体制になっていることを報告したのですが、その後は御本人退席のもとで猛烈な非難の声が飛び交いました。

本来 60 回大会を開催予定(青島)であったことはもとより、これらの経過を含め、ICSB 国際事務局や会長らが何度も会談を申し入れ、応じておきながら、ドタキャンすること実に 5 回、いくら何でもひどいではないかという声で、温厚なルーベン・アスクア前会長(アルゼンチン)でさえ、声を震わせていました。たしかに、私が日本支部「再建」のことを持って行った 2012 年のウェリントン大会理事会には、中国支部からおおぜい来て、2015 年大会青島開催の大風呂敷を広げ、その迫力におされるようにして、60 回大会を委ねる旨理事会が決めた、そうした経過を目の当たりにしておりますので、その後の混乱が関係者にいかに失望を与えたか、想像するに難くありません。

こうした長時間の白熱の議論の後、「ICSB は別途中国を代表する組織との交渉を考慮する」という決議が鄭剛氏に伝えられました。

このように、「日、中、印問題」に終始した ICSB 理事会で、まあ予想されたことながら、日本はかなりの宿題をもらってしまったことは否定できません。中国、インドのとは

っちりの観もありますが。

10日理事会では、詳細は省きますが、このほかに ICSB の財政状況や、今後の大会開催展望、新たな支部参加などがこもごも議論されました。これには私のほか、加藤 JICSB 副委員長も同席しております。

ACSB 理事会と今後の展望

7日（日曜）朝には、コンラッドホテル内で ACSB の理事会が開かれました。

キム・キチャン氏やキム・ヨンジン氏らが議論をリードし、HeBEX 共同研究の進展を強調するとともに、ACSB 自体の活動強化として、ジャーナルの刊行をはかりたい、そのために従来 KASBS 韓国中小企業学会の雑誌であった JSBI 誌 (Journal of Small Business and Innovation) を、英語版に限定し、ICSB における JSBM 誌同様、正式に ACSB の機関誌としたいという提案がありました。これは異議なく了承され、さらに SEAANZ オーストラリア・ニュージーランド連合から出席していたティム・マッザロール Tim Mazzarol 氏からは、SEAANZ の機関誌・Small Enterprise Research も、同様に ACSB の機関誌としてはどうかという提案があり、これも了承されました。

JSBI の編集委員会には、JICSB から岡室副委員長、高橋徳行理事らがすでに加えられています。このようなかたちで、国際ジャーナルによる研究成果の発表の機会が増えるのは、ACSB 大会での研究発表とあわせ、誠に有り難いことですが、今後 JSBI 誌などの刊行費用の負担等はどうなるのか、そうした議論は全くなかったのも、私にはいさか気がかりでもありました。今のところは、ほぼ一体化している KASBS と ICSBKorea がすべてを負担してくれるのであれば、それは有り難い限りですが、「持続可能」のなかかどうか、ましてや日本の研究者などが「ただ乗りする」ということでいいのか、疑問は残ります。とりあえずは、日本からの投稿の機会は JICSB 会員に限定、ということにできないでしょうか。

ACSB として今後の組織拡大を進めるために、ASEAN レベルの国を超えた組織づくりという考え方が、キム氏らから示されましたが、これには異論も多々出ました。ECSB のように、アジア全域を対象とした連合体が ACSB なので、また ASEAN レベルというのは屋上屋を重ねる、ASEAN 諸国のうちからもマレーシアなど、すでに各国の支部を確立したところも少なくない、等々です。議論ののち、とりあえずは過渡的なかたちとして、ASEAN 内の国を超えた準加盟的組織づくりをはかり、これを用いて各国での支部確立をすすめる、そのなかでたとえばベトナムやミャンマーなどでの動きを支援する、こういった方向となりました。

また、今回の「ICSB アカデミー」のような、若手育成のための「ACSB アカデミー」を設けたいという提案もありました。すでに昨年ソウル ACSB の際にも似たような場を設定し、大学関係者や各企業などの協力を得て好評であったので、ぜひ進めたいという考えでした。私は日本支部として、考え方は理解できるものの、こうした件は支部内にまだ諮ってはいない、それゆえいま賛否を述べることはできないとして、「態度保留」としまし

た。

総論的にはもちろん良い試みであり、まさに「教育的機会」としての ICSB、ACSB の存在意義を発揮するものと言うことができますが、もちろんそのための財源、参加者の自己負担などの財政問題は避けることができません。実際に、日本からも指導者を出して欲しいとなった際、どうするかという問題も今後生じましょう。そしてなにより、多くの若手研究者がいま属している各大学や大学院での教育課程などとの関係をどう整合させるかという問題が大きいと思うのです。それらとうまく組み合わせ、こうした国際的な機会を十分生かしたプログラムを組み立てられれば、非常に有意義かつ画期的なカタチを作れましょうが、それを抜きにして国際的な場だけが先行しても、参加者の確保だけでも困難になりましょう。少なくとも大学院生たちは、学位論文を仕上げるのが最優先課題なのですし。いずれにしても、新たな宿題をもらいました。

なお、今秋の ACSB ミリ大会の詳細に関しては、肝心の主催のマレーシアの幹部たちが ACSB 理事会には来なかったのが、特段の言及もなしでした。マレーシア中小企業事業団と、ICSB 支部・ACSB 大会実行委員会とは、組織的には必ずしも重なっていないようです。もちろん ACSB ミリ大会の詳細は、別途発表されています。

そういうわけで、マレーシア支部からの参加はないままに、キム氏のあとの ACSB 会長にはマレーシア支部代表のザカリア・タイブ氏が満場一致で推されたのでした。ところがそのあと同氏からのメールで、無理、辞退という返事が来る有様です。またインドネシアで来年の ACSB という話しも出たのですが、当のインドネシア関係者があとから理事会の場に到着し、政府関連の大物であるヘルマワン・カルタヤ氏（政府協組・中小企業省顧問）らが目を丸くする事態、なんともキム氏らの根回しの悪さも目立ちました。

ですから、実は来年の ACSB 大会のことは未確定状態です。インドネシアのほか、台湾でという声も出ているのですが。

日本のプレゼンス

日本からは前記のように、加藤敦 JICSB 副委員長（同志社女子大学教授）、山本聡会員（広報担当、東京経済大学准教授）、久保田典男会員（島根県立大学准教授）、弘中央子会員（滋賀大学教授、クアラルンプール滞在中）が参加、研究発表を行いました。また、加藤氏の共同研究者として三宅えり子氏（同志社女子大学教授）も参加され、さらにブレイメン大学在学の播磨亜希氏も昨年につき参加されていました。

しかしまた、記さねばならないのは、関西学院大学のインド出身の教授が、現地に向かう前に入国ビザを取得できず、参加を断念せざるを得なくなったという事態です。UAE は米国、西欧、豪州、日本や韓国、近隣イスラム諸国などからの来訪客は大歓迎である（もちろん事前ビザ取得不要）反面、インドやアフリカ等からの入国には厳しく、このような事態が今回いくつも生じたようです。ICSB 理事会でも冒頭、この「ビザ問題」の議論に時間が割かれ、現地実行委員会としていろいろ努力はしたものの、残念ながら政府の意向にまでは影響力を及ぼせない、そうした経過だという説明がありました。JICSB としても、同氏の参加に力を貸したいところであったのですが、事態が開催直前の展開でもあり、こ

のような、国際交流の流れに反する事態に至ってしまったのは実に残念な限りです。

東京とドバイとは、直行便で9時間あまりです。同じアジア圏のうちでもかなり離れてはいるものの、現在の世界の成長のセンターたるこうした地域との関係を強化していくことは、日本経済にとっては不可避の課題と申せましょう。もちろん同じアラビア半島の反対側では戦乱が続き、大変な状況にあります。どのようにしても、世界の共存共栄を実現していく、これに日本も重要な役割を担っていくことは不可欠であると思います。反映するドバイの建設工事はもとより、市の中心を走る「ドバイメトロ」鉄道網は日本製でもあります。

日本の中小企業研究を代表する存在としての JICSB も、当面は ACSB ミリ大会などアジア地域の活動にさらにコミットしていくことが欠かせないでしょう。ICSB 大会後、フィリピンから支部設立の動きが伝えられました。こうした胎動のもとで、日本の参加と貢献が依然、その経済規模などにふさわしくないままというのでは、残念ながら世界は納得してくれません。当面は、ICSB と ISBC との関係を含め、学界のみならず実業界、行政等を含めた、日本の中小企業の存在と役割と研究の蓄積を、世界につなげるようなまとまった努力がなにより必要なのではないのでしょうか。さらに、先にも記したように、世界の流れにならい、日本からも若手研究者が国際的な場にどんどん参加し、研究発表などに取り組むことがますます大切であると、いまさらながらに痛感をします。